



## インフルエンザのシーズンに向けて

感染制御部

### 1. インフルエンザに関する状況

インフルエンザのシーズンに備えて、ワクチンの予防接種の時期がやってきました。図1に2004/05 シーズンまでの過去のインフルエンザの報告数の状況を示しました。昨年は流行のピークが、例年よりも遅く、かつ罹患患者数も多い流行の年であったと言えます。個人的にはこのような変化は地球の温暖化などとも無関係ではないような気がします。

本年度も、昨年と同程度の流行が起こることが予測されますし、流行のシーズンが長引く可能性もあるので、一層の注意が必要です。

また、不気味なのは鳥インフルエンザや SARS の動向です。鳥インフルエンザに関しては、東南アジアで持続した症例報告がなされており、いつ新型インフルエンザとして地球規模の大流行（パンデミック）を起こしてもおかしくない状態です。東欧にも鳥が運んでいったことが確認されています。また、SARS もいつ再燃するか、こちらも心配です。これらの感染症がもし同時に流行した場合は、インフルエンザとの鑑別が困難ですので、ワクチンによって、インフルエンザを予防することは、間接的に新興感染症の診療の混乱を少なくすることができます。

本年度のワクチン株と昨年度のワクチン株を表1に示します。

図1. 過去10年間のインフルエンザの定点報告状況

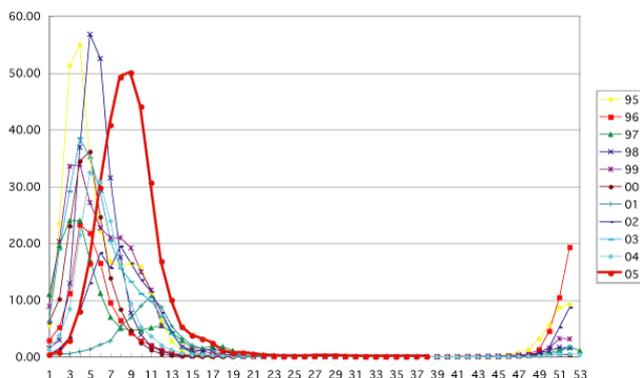


表1 平成16年度と17年度のワクチン株

株	平成17年度(2005/2006シーズン)	平成16年度(2004/2005シーズン)
A型	A/ニュ-カレドニア/20/99 (H1N1)	A/ニュ-カレドニア/20/99(H1N1)
	A/ニュ-ヨ-ク/55/2004 (H3N2)	A/ワイオミング/3/2003 (H3N2)
B型	B/上海/361/2002	B/上海/361/2002

### 2. 阪大病院のワクチン接種の実績

阪大病院職員の皆様には、インフルエンザワクチン接種を奨励し、実施してまいりました。最近の2年間では、平成15年度1,988名、平成16年度2,034名と大部分の職員の方がワクチン接種を受けられておられます。

職員のインフルエンザの発症状況は、平成15年度が医師9名、看護師16名、平成16年度は医師9名、看護師32名で、全国的な流行と同様16年度に増加がみられております。

### 3. インフルエンザワクチン接種の副作用について

昨年度はワクチン接種に際し、副作用調査を行いました。その結果、回答を得られた1245名のうち482名(38.7%)に副反応が報告されました。その内訳は、過敏症状(局所の掻痒感、紅斑、発疹、蕁麻疹)177名(36.7%)、全身症状(倦怠感、頭痛、発熱)135名(28%)でした。いずれも軽症で加療を要するような副反応はみられませんでした。

表2に、接種要注意者を挙げます。とくに1は該当する方が多いと思われそうですが、発熱は前回33名全体の2.6%が報告されております。発熱の程度にも依りますので、接種時に医師と相談ください。

表2 インフルエンザ予防接種要注意者

1. 前回のインフルエンザ予防接種で2日以内に発熱のみられた者又は全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を呈したことがある者
2. 過去にけいれんの既往のある者
3. 過去に免疫不全の診断がなされている者
4. 気管支喘息のある患者
5. インフルエンザワクチンの成分又は鶏卵、鶏肉、その他鶏由来の物に対して、アレルギーを呈するおそれのある者
6. 心臓血管系疾患、じん臓疾患、肝臓疾患、血液疾患等の基礎疾患を有することが明らかな者

### 4. インフルエンザの予防

インフルエンザの予防の第一はワクチンの接種ですが、マスクの着用は同じくらい重要です。インフルエンザは飛沫感染が主な感染経路ですので、患者様と接するときは、マスクの着用による感染防御が可能です。その他、一般感冒の

予防も含めてうがいや手洗いも有効性が期待できます。

#### 5. インフルエンザにかかったら

各部署に配布いたしております「感染管理マニュアル」に詳しく対処方法を記載しておりますので、ご一読ください。シーズン中発熱があったら、まずマスクの着用を行なってください。その後、発熱が持続し 38 を越えるようであれば、所定の手続きを行い、外来を受診してください。熱があるのに、無理に働くことは、院内感染を引き起こす原因となります。マスクの着用と早めの受診を心がけてください。